

東亜同文書院大学から愛知大学へ

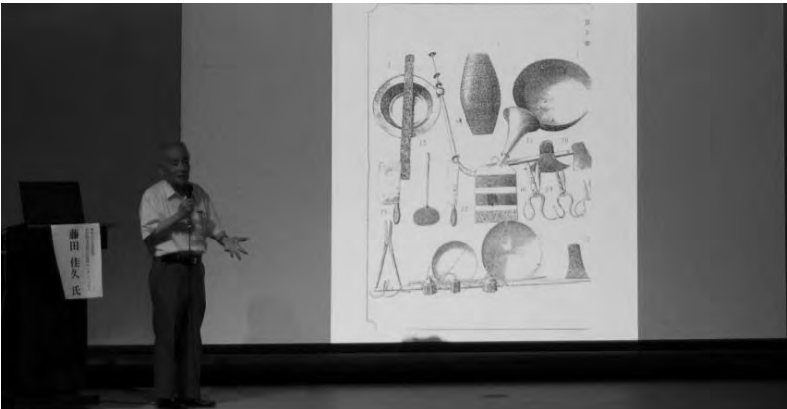
愛知大学名誉教授、愛知大学東亜同文書院大学記念センターフェロー 藤田 佳久
(2016年8月27日 名古屋市博物館)

はじめに

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました愛知大学の藤田と申します。東亜同文書院記念センターには長く関わっておりまして、今回こういうかたちでこういう会が設けたことを大変喜んでおります。暑い中、多くの方にご出席いただきまして心より御礼を申し上げたいと思います。今日、私に与えられたタイトルは「東亜同文書院大学から愛知大学へ」。今ビデオをご覧になったと思います。あれも我々、一生懸命作りまして、特に前半の歴史的な書院のデータに関しましては、当時の我々の全力投球で作った作品であります。今日は東亜同文書院から愛知大学へ、私もこういう会がありますとこのタイトルでお話してまいりましたが、今日は若干変えさせていただいて、できれば学生諸君も少し目に見えるようなかたちでお話ができないかということを考えました。尚、お手元にプリントがございますが、今日お話しする画像の、ほんとのエッセンスだけしかピックアップして載せてありません。一番最後に終わりにということで少し長々しい文章で書いてあります。この辺のところは時間があればご説明をして、うまくいかなかったら皆さん方でお読みいただけたらありがたいと思っております。

1. 荒尾精の日清貿易研究所

いきなり出てきたのがこういう品物ですね。これは銅で作った清国の時代の製品です。この図は言ってみれば商品見本みたいなものですがけれども。誰がこういう見本を集めてきて作ったかという、先ほどもお話にありました一番最初の荒尾精。この人が幕末、尾張藩出身で、名古屋の愛知大学車道校舎の近くで育った方です。幕末に尾張藩はなくなってしまいますから、お父さんは失業してしまって東京で荒物屋をやりますけれど。その時に荒尾精は警察署の署長に才能を見込まれ、書生に雇われました。当時の警察署は多くの人たちが集まってきました。当時、最大の問題は隣の朝鮮と貿易ができないことでした。征



韓論を西郷隆盛がやり出したりするわけですがけれども。その中で荒尾は国際関係を初めて知るのでですね。朝鮮の背後に清国がいる。その清国とは一体どんなところだろうかという関心を持ち、行きたくなるのです。当時は

学校制度もまだしっかりしていませんでしたから、軍の関係の学校へ入学し、陸軍大学校ができた時にはそこへ入学するというかたちで勉強するわけです。しかしどうしても清国へ行きたいというのですが、最初はなかなか行かせてもらえなかったのですが、やっと清国へ行って清国には色々こういう商品があると紹介したのです。その背景には何があるかという清国と日本が協同して貿易をやれば列強に対抗できるだろう。清国まできてる列強のパワーが日本に及ばないためにも日本と清国は協同で貿易事業をやったらいんじゃないかという発想がこれなんです。先ほど書院が火事で焼けてしまった写真がありましたけれども、あの時も学生諸君が大旅行で全国から集めてきた商品 10 万点が焼けてしまった。もし、今あれば大変素晴らしい博物館ができていたと思うのです。その一番のものには、こういうのがあるよと日本人に紹介した。その時に清国中のどういう場所を自分の知識の対象にしたかというのを彼が後に書く『清国通商総覧』。日本人が初めて清国の実態を書いた。それまでは漢詩漢文でインテリの人たちが書いた素晴らしい清国のイメージだったのですが、実態はそうではないということで、初めてのことでびっくりした日本人にたくさん本が売れたのです。その中に描いている地名を私が地図化しましたけれども、ほとんど清国中の情報が入っています。そこで彼は日本へ帰ってきてから、一番最初に清国との貿易実務をこなせる人材養成をしたいということで 1890 年、日清貿易研究所というビジネス学校を設立します。しかし、お金がなくて大変苦勞します。150 人ぐらい入学しますが、半分ぐらいしか卒業できなかったのです。この時どこから入ってきたか。これはこれでまとめると、一つの論文になってしまうのですが、幕末から明治にかけては西南戦争もそうでしたけれども、官軍が東北日本を圧迫します。西南戦争で薩摩のほうの若者も敗れて前途を見失ってしまう。そういう若者たちが大陸へ渡った。そういう学生も受け入れた学校にもなったわけです。ここで盛んに貿易実務を教えるわけです。これが最初の入学生ですね。それを作ったのが荒尾精ですね。しかしこの後、日清戦争が起こってしまってこの学校をまだ続けることが難しくなると同時に、中国語ができるようになった卒業生が当時の軍隊の通訳充補にさせられてしまうのです。貿易実務を一生懸命勉強したのにですね。したがって、半分ぐらいは亡くなってしまいます。荒尾精はその責任を感じて脱軍籍し、京都へこもってしまうのですけれども、その時に荒尾精は『対清弁妄』など、いくつかの作品を書きますが、ここでいってるのは勝ったとって清国から賠償金をとるなど。とったら日本と清国の関係が悪くなるし、お互いに繁栄できなくなる。ところが当時の世論は勝ったからお金をとれ、賠償金をとれという。それに対して、一生懸命彼は何故賠償金をとってはいけないのかということを主張するのですが、この意見は世論からは認められない。そういうこともあって京都東山のほうに蟄居してしまう。今でもその家が残ってます。他の方が住んでいますね。こうして卒業生の半分近くは日清戦争で亡くなったのです。しかし貿易実務をやったから生き残った方々が、例えば白岩龍平とか大活躍するような企業家が出てきたりする。

2. ビジネススクールとしての東亜同文書院

開設時の東亜同文書院の授業表です。遠くからご覧になって、分かると思うのですが、表の一番右の上、これは中国語ですね。英語とか経済学、商業実務とか、いわゆる貿易上の科目がずらっと並んでいます。戦後になって、荒尾精はスパイだと言われて、大きな誤解を作られてしまうわけです。貿易実務を中心にしてきちんとビジネス教育をやっ

るわけであります。その一方で近衛篤磨、近衛家の人ですね。この方が幕末から明治の若い時代に独学で勉強しました。彼は新政権の成立過程をみて、藩閥政治と軍人が大嫌いだったわけですね。したがって、明治政府の覚えは当然ですけど良くなかった。だから新しい学校を作ろうとしますけれど明治政府がなかなかお金を出してくれない。中国の若い研究者なんかはそんなことは無視して、東亜同文書院っていうのは日本の軍部が作った学校だとかたちで発表します。びっくり仰天してしまいますけど、さっきの荒尾精についても最近の若い日本の研究者でさえ、軍から送りこまれて日清貿易研究所を作ったのだと書いている。事実は全く違うのですね。本人が作ったのですね。事実をふまえないイデオロギー的な世界がまだ残ってる。戦後、書院卒業生はそういうものに反発して、しばらく書院を語らななかったことがありました。書院を取り囲む環境に政治的な歴史的な背景があってまだまだイデオロギーをふりかざして介入する人が多いのですね。

近衛篤磨は2回ほどヨーロッパへ行ってその帰りに、清国の两江総督と話し合いをして、两江総督は日清戦争で日本軍が清国に勝ったのは、日本の急激な近代化があったと認め、近衛はそのノウハウを清国の人に教え、日本と清国の両方の学生を集めて勉強させたい。その学校を南京に作りたいと伝えるわけです。すると総督はオッケーと言うわけです。そしたらすぐに有能な若者を日本に送りたいと言ってきたのですけれど、学校はすぐにはできない。そこで近衛篤磨は自宅へ戻ってそこに校舎を建てて留学生を受け入れた。それが東京同文書院ですね。こういうかたちで開設展開していくわけです。

これは最初の学生の一部ですけれど、正確には誰がどこ行くかまだよく分かっていないところがあります。南京同文書院生17名ほどはこういうかたちで留学したのだろうか。津軽藩みたいに奥羽越列藩に参加しなかった藩、そういう背景の中で若者が集まったということが分かります。こうして南京には、南京同文書院ができたのですけれども、清国の学生は東京同文書院を目指したため、日本人だけの学校として出発します。しかし、折しも北京から義和団の乱という外国勢力を排斥する運動が広がって南京にもせまってくるから、南京は危険だというわけで、租界のある上海へ移ることになったのです。その時に先ほどの荒尾精がさらにその後、新しい本格的なビジネススクールを作ろうというプランを提唱し、それと合体して上海に東亜同文書院というかたちで学校が誕生していくわけです。その前に東亜同文書院の経営母体である東亜同文会が、アジア的な世界の中で積極的に教育文化事業を展開したわけです。東亜同文会の会長は先ほどの近衛篤磨で、軍隊ではなくて教育文化事業でもって交流すべきだということで、先ほどの東京同文書院ができていますけれど、隣の朝鮮半島もなかなかうまくまとまらないのは教育が不十分だというわけで学校を建て、また、清国福建省のほうにも色々な学校に助成金を出したりしております。第2次上海事変で3度目につくった徐家匯の校舎は焼失し、隣の上海交通大学を借用します。そして大学へ昇格するさいに理工系を含む総合大学案をつくり、しかも北京進出まで検討しますが、戦時下で資金確保が困難で実現しませんでした。しかし、既存の理工系や経済の専門学校などを吸収し、総合大学化の基礎はつくっています。しかし、まもなく終戦になってしまってそれをより発展させるところまではいかなかったのです。最後の学長であった本間先生は愛知大学を作りますが、本間先生の頭の中には理系の学部も作りたいという考えがあったことが、こういうことから分かります。

これは一期生の入学生。どこから入ったかということですね。募集時期がちょっと遅れたので全国的には最初は知られていなかったのですけれど、各県から基本的には給費生が

二人枠。荒尾精はビジネススクールの構想とそこから先はさらにアジアでの貿易の展開を考える。書院は根津一が任されて院長になったわけです。この人は62歳まで長いこと院長を務めて書院の神様みたいにいわれた人です。残念ながら愛知県からは最初の入学生はいませんでした。

次は二期生からです。こういうかたちで出発前に東京の華族会館に集まって招見式をやるのです。これが近衛篤磨です。それからこれが根津ですね。この式のあと、東京の宮城やその他の中心的施設、あるいは大阪、京都など、第一線の姿を見せて上海に行くわけです。入学者の出身地は東北地方がやっぱり薄いですね。一方、特に九州地方や中国地方からは多くの人が入ってきます。

これが一番最盛期の、先ほどもありました徐家滙の校舎ですね。一番書院が繁栄した時の校舎です。1937年の第二次上海事変で焼けてしまうわけです。これが初代・第3代の院長、根津一ですね。そして戦時中の総理大臣、近衛文磨ですね。大内暢三、この方は先ほどの近衛篤磨のいってみれば秘書みたいなことをずっとやっていた方ですね。世界も色々なところへ出かけた経験豊かな方です。次の矢田は文部官僚です。そして最後が愛知大学を作ることになった本間喜一学長。最盛期の立派な校舎は、根津先生のお弟子さんが設計して作った。隣がフランス租界ですから、フランス租界に負けないような建物を作ったのです。そのため、上海の絵葉書には必ずこの東亜同文書院のこの建物が出てきます。

学生たちは基本的には当時の中国語を一生懸命勉強する。当時は文法書がありませんでしたから、頭の中に丸暗記をするというやり方で、そのテキストが『華語萃編』でこれは初集でありますけれど、第4集まで編集されています。日常的なところから旅先で知事の人たちに会う時の挨拶から手紙とか色々なことまで含めて学んだ。その中国語学習は、例えば、この4人が愛知県出身で入ったとすると愛知県出身の2年生が1年生を責任持って教えるという仕組みです。朝昼晩と毎日発音練習がつづきます。できないと2年生が先生から叱られ、責任を取らされるので一生懸命、勉強し、こういうかたちでのトレーニングが実践的に役立ったのです。後に文法的なところが入りますけれど、最初のほうは丸暗記して習得したと。

次は最初の頃の科目ですね。細かいからお話すると長くなってしまいますけれど、法律、経済、商業学、英語、中国語と。とくに中国語が多いですね。中国語が週に12コマ。英語が6コマ。希望があれば上海には国際人がいるから色々な国の言葉を勉強できた。これが一番最初の科目一覧です。この後ずっと充実していきますけれども、戦後突然イデオロギー的な人達からスパイ学校だなんて言われましたけれども、そんなことはないのです。ビジネススクールで学校が設立されたことからよく分かると思います。

3. 東アジアを知る「大調査旅行」の展開

そういう中で一つの大きなメインの行事は「大旅行」で、3か月から5か月ぐらいのフィールドワークというのをやった。これは中国の中の取引慣習の調査というのが最初ですね。そのうち学生諸君も幅が広がって文化的な、あるいは歴史的な事柄も踏まえて関心と調査の幅が広がっていくわけです。それが調査旅行の成果の一部として『省別全誌』のシリーズ本になって出版されるようになっていくわけです。20年後にもう一度企画があり、書院生の大調査旅行記録が2回にわたって編集されます。このような地域調査による地域研究は世界で最初の作品です。書院の学生たちは、2~6人ほどで班をつくり、自分達の設計で

コースと調査地を設定し、日記と調査報告書を作成しました。嘘を絶対書いてはいけない。きちんと自分で確認したこと以外は書くなと書院の指導者から厳格に指導されています。彼らは色々なコースを巡りますが、全部で 700 コースあります。東南アジアから、満洲も対象になってるのです。各班にカメラが一台与えられます。そのカメラでもって当時の状況を撮影してるのですね。僻地でソ連の国境線のところが満洲ですね。色々なところで珍しい風物を撮影しています。調査旅行の調査は卒業論文ですね。それとしてまとめる。色々貴重な写真が入っています。これも北満の風景ですね。後半になるとかなり満洲へ入っていった時期があります。写真で風景を見ていただいて。これは蒙古ですね。蒙古風な服装を着た人達が映っています。こちらは山西省ですね。歩きが基本手段ですけど、時々馬に乗ったりして旅を続けております。孫文が生まれた家なんていうのも写真に撮られております。こちらはベトナム。これは 2 人だけで行ったケース。だいたい 5、6 人が多いですね。これは南方のほう、特に植民地の時の支配者と住民に対する色々な思いを記しています。こうして出来上がった旅行記に関しましては有力な方が揮毫を寄せてくれるわけです。これは福島安正。シベリア横断旅行をした方ですね。これは大谷光瑞。大谷光瑞は最初ロンドンから中央アジアに来て、さあ遺跡の調査だという時に、家が大変だということでインドへ出て帰ってしまった。あと残された 2 人はこつこつと北京まで歩くのです。そういった縁もあって大谷光瑞が揮毫を寄せています。それから近衛文麿も。大内暢三は先ほども言った大学昇格時の院長ですね。これは犬養毅の揮毫ですね。彼は五・一五事件で暗殺されてしまいます。これは近衛展示会場にも大きな額が掲げられていますが黎元洪の筆ですね。元々は清国側の大将だったのでですけど、革命軍に敗れた時、革命軍に大将として出すほどの人物がいらないからお前さんなれって言われて大将になり、のちに大統領になっています。これは段祺瑞。華東のほうから華北のほうを中心に活躍した人です。これは孫文ですね。孫文は今度の展示会のメインでもあります。こういう人たちの多くは日本に留学していたのです。それで日本の書院学生を受け入れてくれた。そういうわけで学生たちが大旅行を活発に行います。これは一部だけしか表示してありませんが、それも 5 期から 23 期の書院生の大調査旅行ルートを示したものです。全部で 44 期(学部生は 42 期)までやっていますから、東南アジアとか、満洲とか、ソビエトの南のほうまでも入っております。毎年 5 月から始まったのですよ。その最初のきっかけは、今日は話を省きますけれど、シルクロードの調査をやって日英同盟のイギリス側の要求に対応したのです。日本政府は藩閥嫌いな近衛篤麿が好きではなかったものですから、イギリス側からの現地情報を与えられなかったのです。それが 5 人の書院生による 2 年間の西域調査で大成功して政府から謝礼として 3 万円もらったのです。3 万円は 3 年分の調査費分しかないけれど、非常に優れた調査が行われたので、書院の当局は 5 期生から自主的な調査旅行に対してお金を出すようになって、全部で 42 期生までですけど、書院としての専門部学校も独自に大調査旅行をしましたから、44 期ぐらいまでで全部で 700 コースの大調査旅行を行ったのです。そしてこういうレポートを書き、それをもとに前述の『省別全誌』にまとめ刊行されたわけです。その内容はまさに学生のレポートだけに依拠しています。

ところで、下の赤いところが東亜同文書院時代、次は大学へ昇格します。大学へ昇格すると伝統的な東亜同文書院が消えてしまうというわけで、その復活の専門部を作ったわけですね。これは戦争が終わる頃の 3 年間ぐらいですね。九州、西日本の出身者が多いですね。それから東北地方は少ないですね。岩手県など県になかなかお金がなくて出せなかつ

たところもあります。ここは愛知県。ほとんど書院生としての卒業ですね。このように書院入学生の県にはいくつかのパターンがあります。これは愛知県。時々入学生が居なかったりする程度。大学へ昇格してからは安定して入学しています。熊本は上海と一番密接な関係を持っているので、ずっと多く入学生を出しています。東京は大学へ昇格してから入学生が増えます。大阪もそうです。特徴は、例えば愛知県の場合、戦前の段階ですけど1914年の入学生と1926年の入学生ですね。出身学校が書いていないから分からないですね。26年までを整理するとこういうかたちになります。当時の中学校もそう多くはありませんでした。今の高校ですと、旭丘とか明和、瑞陵とか、岡崎、時習館などから、学生が集められた。授業料はほとんどタダですから、旧制の中卒のうち、もっと勉強したい人たちが書院へ入学してきた。

彼らがどこに就職したかということですが、名前が出ていますから、さっと見ていただけたらと思います。色々な所へ就職して、中には愛知県に帰ってきた人もいます。要するに義務は何もなかった。自分で頑張れば良いということだったのですね。これ19期から22期までですね。地元からアジア全域で活躍された。24期から25期でも多くの人が非常に活躍されたわけなんです。書院の卒業生で判明しているところは大手の企業へ入って、金融機関も横浜正金、これは今の東京銀行の元ですね。台湾銀行とか朝鮮銀行、日本銀行など、ずいぶん広く、たくさん活躍をされたことが分かります。棒グラフで示しますとここが支部でそれが150人。海外にも展開していたことが分かります。今の棒グラフ以外に大陸のほうでも個別に存在してる人たちがたくさんいます。それも拾い上げて図にしました。これが日本です。先ほどの支部以外に、支部に入っていない人たちがこれだけ日本の中でも帰ってきて個人会員として活躍しているわけですね。

これは今から20年ほど前に、1,400人ほどがご存命だったので、そういう人たちを中心にアンケートしたのです。それによると、書院から得たものは多大にあったと。中国への理解と国際感覚とか世界視野とか後世にいきる力、自信、書院精神とか誇りとかを回答しています。これは先ほどの卒業生の10年後ですね。大陸ではこういうかたちで卒業生が各分野に就職しています。昭和12年ですけど、満洲国へは230人も入った。中国語ができるから採用されたということですが、実力もあるから色々な分野で多くの人たちが活躍することがお分かりいただけると思います。戦後もちょっと見ていきますと貿易、生産、流通、運輸など実業界を中心にして教育、ジャーナリズムなども含め、活躍をしていることが分かります。

4. 愛知大学の誕生

敗戦が刻々と迫ってくる中で、上海にあったがゆえに日本国内の情報とは違った国際情報が入ってくるので、最後の学長であった本間先生がそういうものを集約判断しながら日本に書院の拠点を作るという決断をするわけです。そして1944年、富山の呉羽紡績ですね。戦時中、飛行機を作っていたのです。そこへ校舎を作って、1945年度の入学生を受け入れたのです。何故かという最後の学年はもう安全に東シナ海を渡れませんでした。終戦により上海の書院は閉校しますが、呉羽高校の佐伯分校長はこれまでの日中間の実績をふまえて、政府に存続願いを出します。すると時の外務大臣吉田茂は存続を認めたのです。こうして呉羽校舎は終戦直後再開したのです。しかし、GHQが新しく入ってくると、戦時中の総理大臣近衛文麿が自殺したということがあって、経営母体の東亜同文会を閉鎖してし

まった。そこで本間学長はすぐ新しい学校を作ろうというわけで呉羽分校にいた愛知県出身の神谷龍男という先生が豊橋に候補地を見つけた。元陸軍第 15 師団があったところですね。その後、本校が上海にいる間、呉羽分校では書院が今後どうあるべきかという問題を中心に検討をつづけ、その中である大学像を模索していきます。これが非常に重要だったわけですね。本校の人たちが帰ってきたときに新しい大学の設立に向けた議論が新大学設立申請の内容をほぼカバーしていたのです。本間先生たちが帰ってきたのは敗戦の翌年の昭和 21 年 5 月ぐらいだったと思います。10 月には申請して 11 月には認可されたのですね。そんな早く何故できたかという点で呉羽分校の人たちが事前に努力をしていた。しかも豊橋市が全面的な協力をし、さらに本間先生の指導もあったというようなことですね。これが当時の面影の残った校舎を撮影しに行った時の呉羽分校のあった建物です。そして新しい体制作りを豊橋市や市の財界の人たちとやったと。当時の豊橋市長は横田忍氏。俺は三河人だから任せなさいというような大きな心の人だったのですね。これは学長になる 3 人の先生と関係者が一同に揃った時の写真です。左から前述の神谷先生、河合元豊橋市長、小岩井先生、林先生、本間先生、元豊橋商工会議所会頭の神野太郎氏、神野三郎氏、四方先生、松坂先生、太田英一先生です。左から 4 人目の林毅陸先生が最初の愛知大学学長です。書院最後の本間学長は、学徒出陣で学生を戦場へ送ってしまったことを反省し、そのまま学長になるわけにいかない、というわけで、新しく慶應の前塾長を呼んできたのです。京城帝大から赴任された松坂先生、のちに名古屋大学の総長になります。太田英一先生も呉羽校舎時代に戦後の新しい大学構想を作り出して今の愛知大学の基を作られました。最終的には、昭和 21 年（1946）11 月 15 日に旧制大学として認められるわけですね。初代学長は林先生。続いて本間先生、続いて小岩井先生というかたちで展開していきます。このように、愛知大学が終戦のあくる年にきわめて迅速に設立されたというのも、書院というバックがあったためですね。書院と愛知大学との繋がりというのはやっぱり連続しているということが分かります。大学に移った人もおりましたけれどまだ大陸にはたくさんいる。そういう人たちが一斉に入学してきた。終戦後の 1 年間はまだ愛知大学は設立されていませんでしたから、書院生の中には引揚げ後に他の大学へ入学した学生もいました。愛知大学が設立されると、この愛知大学の中心は書院の人たちであります。色々な高等学校とか専門学校など実に 80 余校の学校から入学してきたのです。愛知大学はそういう多様な学生を受け入れながら成立したという極めて特異な経過の中で旧制大学として日本で第 49 番目に誕生したのです。しかし、本体は書院で愛知大学を運営する人たちも書院の人たちが中心にやられていたのです。

5. 活躍する卒業生

昭和 24 年には新制大学へ移行します。昭和 27 年はまだこれ旧制と新制が並行します。当時の法経学部は全部で 3,192 人ですかね。ここには色々な方がいたのですね。最初是小崎先生。今 94 歳でご存命ですけれど。愛大から外務省に入られて外交官で活躍された方ですね。こういう方々が思い出を言葉で表している。書院精神の継承とか、勉強をもう一回やり直そうとか。建国大学の人も入ってきた。呉羽分校の出身の井上方弘さんには時々講演をしていただきましたが、この方も金融界で活躍されました。東亜同文書院から愛知大学へ編入した北川文章さん。この前亡くなってしまいましたけど、山一証券の副社長を歴任され、戦前の東亜同文会を引き継いだ霞山会の理事長もなされた方ですね。このように、

戦後の日本の高度経済成長を支えた方が多く輩出されています。愛知大学初期の卒業生も全く同様で、県副知事になられたり、幅広く活躍されています。

このように愛知大学のもつ多様性みたいなものがお分かりいただけるかと思います。しかし、最初の愛知大学設立時には学生たちがあちこちから来ていますから、まとまりがなかったようです。それを前述した小崎さんがリードして市民と合同の運動会、大学祭、文化祭みたいなことを催し、それにより学生達の意識もまとまり一体化したのです。最初入学した女子学生は4人だったのですが、クラスが全部ばらばらになってしまって、女性が入ってきたからと皆緊張し、初体験の学生生活であったと聞いています。

まとめ ー書院から愛大へー

東亜同文書院は、荒尾、近衛、根津の国際的視野をもった若者の構想が実現し、世界に例を見ない先駆的でグローバルなビジネススクールとして作られました。その書院教育のベースは地域調査にあった。実証研究をベースにして大学で学ぶというのは他の学校とはまた違いますね。しかも、学生は県費生の、後で私費生も入ってきますけれど、すぐれた人材が集められた。閉学時には、学長だった本間喜一がベルリン留学時代の苦しい経験があったがゆえに終戦直後の色々な対応を非常に苦労されながらうまくやった。しかも2、3歩先をいつも見た施策を重視したのですね。そして豊橋市やその地域が全面的に受け入れてくれたことですね。設立趣意書の中には今でこそ各大学が国際人の養成を唱えたりしますが、愛知大学は敗戦直後にそれを掲げ、あわせて地域文化への貢献も掲げたというパイオニアです。引揚学生が多かったですから、元々国際的感覚があった。そんな海外体験者が学生として入ってきたころとはその後の新制大学とは大きく違っていています。そこに愛知大学の特徴があります。愛知大学の中に書院の精神やシステムがどんなふうの流れてるかっていうのを自由という精神の尊重の中に見い出せます。独立した経営者を置かず、学長が中心に理事長を兼ねるシステムであります。戦争終了直後から始まった中国との教育文化交流ですね。華日辞典で最後にそれが発展させた中日大辞典の刊行はその代表例です。日本最初の大学院中国研究科と現代中国学部の設置も継承の一つの成果ですね。ただ最後、本間先生が薬師岳遭難の時に責任をとって辞任されましたので、それまで計画していた理工科系の学部をいくつか作りたという構想が実現できなくなってしまったのです。

時間となりましたので、以上で終わりにします。ご清聴ありがとうございました。



(藤田原図)

愛知大学建設時に購入した外題の原図(藤田原図)を複製したものである



(竹生節男原図)

「東洋文書院として愛知大学へ」
念願の中国を極める
今も生きる「書院精神」
「引き継いで大学創生へ」
大陸での勉強が直し
向学心に父からの勧め
「愛知大学から愛知大学へ」
因縁の地から出発し
また戻って再び進学
通算50日の分校授業
ガリ版刷りの教科書で
収機支でパン作り
合宿ゼミは仏法僧聞き
上海組と内地組分離
共通項の「引き揚げ」
「愛知大学から愛知大学へ」
ユニーク学生集まる
単位得て卒業・バイト
紅顔騎士は60人集う
旧制は歌詞の六星新で
憧れの白練相に
寮から下宿の青春

小崎昌彦
二旗明雄
佐藤達也
岡田志彦
井上芳弘
北川文章
大田徹夫
奥田直實
木本一敏

「愛知大学から愛知大学へ」
小崎外交官、世界を巡る
東亜同文書院大学、愛知大学から
各国大使・公使としての軌跡
小崎昌彦

「愛知大学から愛知大学へ」
自由・愛を原動力
「寮からの出発」で
出身校担任の勧め
今顧問い見輩輩入り
「愛知大学から愛知大学へ」
教授陣に魅力感じて
異国中国への興味も
念願の「華の法科」へ
兄の勧めで他校やめて
師弟紡いだ「RKK」
誇りの大石遺産・48冊
病床でもゼミを開講
支部間でOB懇親会も
バイトに氷菓売りも
戻しかった入行ゼミ
「愛知大学から愛知大学へ」
好指導者に恵まれ
就職も初年も前のお蔭
知能地知

甲斐一雄
山本一雄
中根三郎
小崎昌彦
二旗明雄
佐藤達也
岡田志彦
井上芳弘
北川文章
大田徹夫
奥田直實
木本一敏

「学生たちの証言で綴る
創世期の愛知大学」
(愛知大学同窓会)より

おわりに (愛知大学名誉教授 藤田佳久)

「東亜同文書院から愛知大学へ」

1. 東亜同文書院は、世界に例をみない先駆的でグローバルなビジネススクールとして誕生した。荒尾、近衛、根津の国際的視野をもた若者の構想が実現した。
2. そのベースは、世界最大級の地域調査にあり、実証による地域研究の成果をあげた。それはやがて総合的な地域研究へ結実し、「大学」へ昇格した。
3. 学生は県費生で選抜され、何の義務も制約もない自由が保証され、幅広い思想、活動を展開できた。
そのため、卒業後はネットワークと語学を生かし、自らの起業経営のほか、勃興しつつあった各分野の企業を支え、戦後は日本の高度経済成長を支えた。
4. 書院大学最後の本間喜一学長は、バルリン留学時代の経験と戦況の把握から、戦時厳しい折、富山県に呉羽分校を創設し、最後の入学生を収容し教育をした。敗戦後、学業半ばの学生を受け入れるために、GHQを意識しつつ、しかも外地からの引揚学生を収容する大学の設立を図った。愛知大学がそれである。
5. しかし、無一文からの立ち上げは困難で、空襲を逃れた豊橋の予備士官学校の利用と、豊橋市および豊橋財界の全面協力、図書と教員確保のドラマチックな経過の中で「愛知大学」は6大都市以外で初めて誕生した。
6. 設立趣意書にうたわれた地域文化への貢献とならぶ「国際人の養成」は書院の設立に匹敵するほど、戦後日本の大学の中では先駆的で新鮮であった。
7. 開設時の愛知大学は書院からの転入学生を主としながらも、外地にあつた多数の大学や高専の引揚学生、そして内地の大学や高校、高専などからの転入生に加え、出自からいえば国際的で、教員もまた同様であった。
8. 学生たちは不十分な戦後の環境の中にあつたから、書院における「自由」が継承され、自らの意志で、しかも相互の異文化に刺激を受けつつ、活潑に愛大生文化を生み出した。
9. 以上のような経過の中で、すでに学生であつた学生として転入学生を受け入れてスタートした愛知大学は、その後になって誕生した全国の新制大学とは大きく異つており、そこに愛知大学の特質があつた。
10. 最後に、愛知大学に流れる東亜同文書院は、書院大学最後の学長であつた本間喜一が愛大校長、また経営者として担当したこともあって(1)「自由」の重視、(2)独立した経営者を置かず、学長と兼務、(3)図書館、研究所の充実と研究発展、(4)教職員間のコミュニケーションなどに認められる。(5)戦争終了直後から始つた中国との文化、教育交流とその後の発展。(6)書院時代に始つた華日辞典の愛大時代の中日大辞典への継承発展は文字通り書院の直系であり、(7)日本初の大学院中国研究科と現代中国学部は書院史をかかざる愛大であるからその可能になつたのであり、(8)それに関連して始つた学生による中国での現地研究調査もその流れである。ただし、東亜同文書院が東亜同文会をベースに理系をふくむ総合大学化を1940年代に図り、実現したこともあつて、本間喜一学長は愛知大学の総合大学化構想を実現しようとしたが、薬師岳遭難(山岳部)の責任をとりて学長を辞任したため、その構想は今なお実現していない。愛知大学の今後の課題でもある。

(於 2016. 8. 27
名古屋博物館
—書院45年、愛大70年記念—)



ナゴヤカルチャー

ビジネス実践教育の先駆

戦前の半世紀、東亜同文書院という日本の高等教育機関(のち大学)が中国上海にあった。その名前にロマンを感じる方もおられる



大旅行に出発する書院生＝愛知大学所蔵

東亜同文書院と戦後70年

だろうし、陸軍中野学校のようなスパイ学校だと誤解している方もおられるだろう。そして東亜同文書院が今の愛知大学になったと言えは、初めて知ったという方が多いにちがいない。

戦後、大陸から引き揚げてきた書院卒業生は、スパイ学校の卒業生だと言われ、反発して口をつぐんでしまった。書院の実像が見えだしたのは1989年にベルリンの壁が崩壊したところからだ。冷戦

思想が変化し、メディアによる書院への関心が高まり、卒業生が口を開くようになったのである。

知識習得の大調査旅行

東亜同文書院はビジネススクー
ルだった。尾張藩士を父に持つ荒
尾精が近衛篤磨や根津一らと19
01年に設立。アジア支配を進め
ていた西欧列強に対抗し、日清相
互の経済力を向上させることが目
的だった。中国古典をベースにし
た東洋論理によるビジネス実践教
育の先駆といえる。教育の主眼は
二つ。ひとつは、自力で実務をこ
なせるだけの中国語と英語の習

得。そしてもうひとつは、実務に
とどまらず文化、教育、歴史、民
俗などの知識を身につける大調査
旅行だった。

1979年に愛知大学に職を得
た筆者は、大学図書館に保存され
た書院生らによる大旅行調査の報
告書と日誌に出会った。胸躍らせ
ながら膨大な資料を読み込み、全
5巻の大旅行記録をまとめ、教冊
の研究書を本にした。その中で、
たとえば方言と地方ごとの貨幣の
調査から、文化圏と経済圏を地図
上に描くと重なる部分がかかりあ
り、その重なる圏域の歴史的経済
的な独立圏域が今日でも生きてい
ることがわかった。

大旅行は最終学年時、グループ
ごとにテーマとコースを自由に設
定し、5月下旬から8〜6カ月か
けて徒歩で実施した。コースは約
35年間に700を教え、旧満州や
東南アジアも広くカバーした。戦
後アメリカから流行した「地域研
究」に半世紀も先んじた書院生の
研究成果は戦前、『支那省別全
誌』全18巻などに結実した。

中国は日本帝国主義時代の研究
に関心はないという立場をとって
きた。しかし近年は、その姿勢が
変わり、『支那省別全誌』の影本
を出版したり旅行記の翻訳を進め
たりしている。日帝時代への注を
加えつつも、書院の研究成果を評
価し、吸収しようとしている。

愛知大として再生開校

書院は敗戦とともに幕を閉じ、
国内で一時的復活したが、GHQに
よって閉鎖を余儀なくされた。1
946年、豊橋の旧第15師団跡地
に愛知大学として再生開校された
背景には、最後の学長本間喜一と
同窓生らの尽力がある。

筆者は、書院の知られざる部分
の実像化に挑み、その全体像への
関心を広げてきた。国内各地に卒
業生を訪ねて聞き取り調査を続
け、書院生の戦後の軌跡も調べて
きた。そして、戦後日本の経済成
長を核的に支えたのは、広い視
野を養って帰国した書院卒業生た
ちだったという仮説を、ますます
強く持つようになった。

東南アジア、インド、中南米、
台湾などの市場開拓や経営に多く
の書院卒業生がかかわった。もっ
と早く日中間の国交が回復してい
れば、書院生はもっと活躍し、日
中関係の密度も違ったものになっ
ていたとさえ思われる。

1990年代以降の日本経済の
失われた20年は、書院卒業生たち
が第一線から引退した時期と見事
に重なる。戦後70年、書院生は卒
業後も大きな足跡を残した。それ
を可能にしたのは、世界的でも他
例を見ない外地での画期的な教育
システムの発揮にあった。

愛知大学名誉教授 藤田 佳久

ふじた・よしひさ 1940年愛知県生まれ。専門は地理学。2002〜11年に愛知大学東亜同文書院大学記念センター長。著書に『日中に懸ける 東亜同文書院の群像』など。